

莊園公領下の村落における古老の存在形態をめぐって

奥　野　義　雄

はじめに　―諸論稿にみる「古老」の把握から―

中世村落における村落構成員については、多くの先学諸氏によつて論究されてきた^①。とりわけ、清水三男氏は室町時代の村落内部の構成員について、「一応独立的な、その意味で純一な村落が現れ、そのような村落を構成し、代表する者としての番頭があり、名主沙汰人があつた。(中略)番頭制のない所では、おとな・古老・老衆などと称する有力者が事に當つて村を代表した」と言及して、「おとな・古老・老衆」が村落内部の代表者として把握されている。

清水氏が提示した中世村落内部の代表者として、番頭、名主沙汰人、おとな・古老などが挙げられているが、室町期(一五世紀)の村落内部の構成員の指摘にとどまる。

しかし、戸田芳実氏や河音能平氏らは平安期からみられる〈古老〉および村落内有力者について論及している^②。さらに、その後島田次郎氏や入間田宣夫氏は、中世村落共同体の展開過程について検討する中で、その共同体構成員への論究にも及び、〈田堵〉〈住人〉〈百姓〉などとともに〈旧老・古老〉を提示するが、基本的には〈住人〉〈百姓〉に視点がむけられていたと考えられる。

とくに、入間田氏は古代から中世に至る村落の論及で、天喜三(一〇五五)年の「丹波国後河莊田堵等解」(『平

安遺文』第二卷、第七五六号文書）にみえる莊官四名と旧老田堵五名の連署に明示されている備後掾紀と美野介紀と名乗る田堵を、「当時『古老』『邑老』などともよばれてた村落の指導的上層であろう」と推察され、〈古老〉を村落内部の指導者あるいは代表者と考えていることが窺え、すでに触れた清水三男氏の古老の理解と同様である。

さらに、近年には藺部寿樹氏も「古老」について触れながら、中世（前半）における「住人集団」に焦点を絞って論及している。すなわち、「古老・住人集団を中世初期村落」と規定して、前期村落とはみなさない最大の根拠は、島田次郎氏の研究などにみられるように、「住人等解」が十二世紀後期に『百姓等解』に転換するとされていることにある。この点から、「住人等」の村落から『百姓等』の村落になったと考えられているように思われる」と言及し、〈古老〉に主眼を置いている訳ではなかったといえよう。主な視点は、「古老・住人」ではなくて、「住人等」集団であり、藺部氏はこの「住人等」の集団について次のように明示している。すなわち、

この「住人等」集団こそが、古老・住人の村落内身分集団なのである。すなわち、中世前期村落の古老・住人身分は、十一世紀中期に形成したと考えられるのである。

と論及していることと、「村落の古老・住人に対する呼称は、多くが『住人等』という形で集団呼称として用いられている」という言及から想定し得る。

言い換えると、同氏は「住人等」集団に〈古老〉を含んで論及するとともに、〈古老（住人も含めて）〉の呼称を「住人等」の集団呼称として用いられるものであると理解するが、〈古老〉は「住人等」の集団的呼称に埋没する存在であるとも捉えられるであろう

このことは、史料的にどのように〈古老〉が現われているかを検討することによって、その是非が明確になると考えている。

この検討とともに、在地の村落内部での〈古老〉の存在形態および在地での〈古老〉の認識とは別に、在京の莊

園所領の所有者でもある在京の貴族社会内部での〈古老〉の認知を捉えておくことは必要な検討事項であるといえよう。⁽⁸⁾

このようにいくつかの課題は内在すると想定し得るが、まずは〈古老〉〈住人〉〈百姓〉の用語が史料上に現われて、展開していくまでのことを次に考えていくことにしよう。

第一 古老・在地古老・古老住人の用語の出現と初期の古老の存在形態

中世村落内部の構成員の主な階層は、「住人」あるいは「百姓」と呼称される人たちであり、すでに先学諸氏によつて指摘されているとおりである。

ただ、主な構成員ではないが、「古老」の活躍あるいは役割は小さなものではなかったと考えているが、あまり古老に視点を当てた論究はないといえよう。

たとえば、入間田宣夫氏は訴訟文書にみえる連署について、

「旧老」「古老」だけの連署あるいは荘官とともに連署することは比較的初期の例にかぎられる。⁽⁹⁾
と言及され、古老・邑老などは村落内部での指導的上層であることも明示されている。

また、蘭部寿樹氏も中世村落内での古老と住人身分について視点を絞つて論究しているが、実質的には住民身分に焦点が絞られた論述が主であり、史料的にも「古老」云々というよりも「住人」云々というものに傾斜しているように受け留められる。すなわち、古老・住人身分の形成および村落の財政とのかかわりで、

管見の限りにおいても、古老・住人身分の存在がはじめて具体的に確認できるのは、十一世紀中頃である。

住人等、以件浜毛焼、供三度御祭諸節会御□御塩矣

荘園公領下の村落における古老の存在形態をめぐつて

これは一〇五〇年（永承五）の史料であり、ここから志摩国答志郡坂崎東地の住人等が伊勢神宮とおぼしき神社の供祭の貢納をしていることが読みとれる。

と言及され、併せて

管内住人等背起請旨、以下帶宣旨院宣、私領田畠寄神社仏寺権門勢家

またこの史料のように住人は、他へ寄進しない旨の起請を破つても、土地寄進をおこなった。このような住人の盛んな売買や寄進活動の根底には、古老・住人（集団）の開発行爲があつたことは想像に難しくない。

と論及している。^⑩しかし、同氏の指摘された史料からは、古老の存在を読みとることはできない。むしろ、「住人等」の存在を明示することは容易であらう。

二つの論稿を事例に掲げて「古老」の村落内部での存在形態の把握は、現時点では判然としないようにみえる。言い換えると、訴訟文書（史料）に連署する「古老」の存在は初期的事例であつたと認識したとしても、連署以外で「古老」の存在を把握し得ないものであるのかという疑問が生起する。

また、「住人等」の範疇で「古老」の存在を捉えることができるならば、史料的に提示し得るのであるかという課題がのこる（「住人等」の範疇に入る史料の片隣でも提示し得るならば、課題の解決には結びつくかもしれないと想定している）。

そこで、再度「住人」・「百姓」とも関連させながら、主に「古老」の存在する時期―実質的には「古老」の用語出現期―と、その後の展開過程を後述の係争（相論）と村落共同体内部での形態についての論究に繋げるための素描を試行していくことにしたい。

古老の初出は、『常陸国風土記』の同国行方郡の「古老」であるが、^⑪莊園公領下の村落における古老の初出に視点を当てることにしたいので、八世紀初期に現われた行方郡内の古老は除外しておくことにする。

まず、永延元（九八七）年十二月九日付の「筑前国宮崎宮塔院牒」をみると、「欲被早裁免夜須郡鱸野莊十六箇一里官物背例勘責不安状」という文言に続いて、

右件莊立之後、經四十余年、四至之内公田不交、国郡使等專無入檢、而郡司姦偽為宗、構申虚言、籠入公田云々、仍去九月二十五日国使・檢田使・郡司・古老等、相供相糺之間、千百不誤、公田不交、而今称載徵符、

勘責官物、（中略）、衙察之状、且被免違例之勘徵、且被糺郡司之姦偽、（下略）

とあり^⑫（傍点―奥野、以下同様にて略す）、筑前国夜須郡の鱸野莊の四至内に公田があるゆえに官物を勘責した郡司の偽言の真偽確認のために、国使・檢田使・郡司とともに「古老」も相糺するが、莊内に公田はなかったことが明らかになったことを表示している。この院牒に「古老」の用語が現われる。「古老」用語の初見であるといえよう。

そして、この一〇世紀後半の院牒によるかぎり、莊園内の公田の存否確認に国使、檢田使、郡司らが莊域に入っている状況から国衙公権の強弱を想定し得るとともに、この確認に古老が役割を果たしていたことも窺える。

一〇世紀後半に「古老」の用語が現われて以後、一一世紀中頃まで「古老」用語は見出し得ない。すなわち、天喜三（一〇五五）年十月九日付の「伊賀守小野守經請文」にみえる「古老之談話」という文言とともに、同じ天喜三年（十二月？）二十八日付の「丹波国後河莊田堵等解」の「右田堵等、謹檢案内、此御莊者無一步公田相^交事、（中略）、而未如是国事雜役更無被付仰事」云々という記載されていた末尾に、

別当□□介紹

下總介紹（花押）

権檢校出羽介紹（花押）

旧老田堵備後掾紀（花押）

莊園公領下の村落における古老の存在形態をめぐって

美野介紀

大和介紀（花押）

出雲介紀（花押）

信野介紀（花押）

と連署している「旧老」の田堵の存在が窺える¹⁴。この旧老田堵と称した備後掾紀氏に加えて、美野介紀氏以下三名も旧老田堵であると考えられる。この田堵等解は、田堵あるいは古老に関する論究で掲げられる著名な史料であり、備後掾紀氏以下の人たちは旧老田堵であると理解されている。

この一二世紀中頃の田堵等解もさきの院牒と同様に、荘内公田の存否と国役免除の沙汰がないことに対する後河莊旧老田堵らの解文である。そして、この解文にみえる「旧老田堵」以外に同莊には田堵は存在していたと想定するならば、旧老すなわち古老の田堵らが代表して、本家の裁許を請申したことになる。

一一世紀中頃に「旧老」古老¹⁵という用語で表現した田堵が現われて以後、「古老」用語を明示する用語は一一世紀（一〇八〇年代）後半まで待たねばならない。

それは、伊賀国で勢力を持っていた藤原真遠（実遠）にかかわる著名な史料である。すなわち、寛治二（一〇八八）年六月十九日付の「東大寺領伊賀国名張郡定使懸光国解案」がそれで、この解案をみると、

右、光国謹案事情、件真遠朝臣之例、在地古[・]老[・]者[・]召[・]問[・]子[・]細[・]之[・]处[・]、彼真遠為当国猛者、諸郡有真遠之所領、仍郡々令立田屋、所宛昨佃也、国内人民皆為彼従者所服仕也、仍不取加地子、至于他在京領主者、皆所令徴取加地子也、（中略）、兼又東大寺黒田御莊住人相語公民、致如此之訴云々（下略）

とあり¹⁶（傍線―奥野、以下同様に略す）、伊賀国の「在地古老」を召し問うと、「彼真遠為当国猛者」からはじまって、「皆所令徴取加地子也」という記載までの内容を在地古老が詳細に語ったと考えている（この記載以下にも

古老が話した内容と想定し得る文書はあるが、ここでは割愛する。

伊賀国の在地古老の加地子徴取の有無についての語りとともに、黒田莊住人が公民と相語つて訴えに至ったことも興味深い事象であるが、それよりも東大寺「黒田莊住人」という用語がみられることである。

「住人」云々という用語は、すでに掲げた天喜三年十月九日付の「伊賀守小野守経請文」に現われた「古老之談話」の文言の少し前の記載に「鞍田・湯船等邑住人」という用語がみられ、邑^⑩村の「住人」という用語の初見であるかもしれない。一一世紀中頃には「古老」と「住人」——それも村の住人——が並行して現われる。

このような事象は、一二世紀（一一三〇年代）前半にもみられ、天承元（一一三一）年五月十三日付の「筑前国把岐浦住人隆実請文」がそれであり、この請文をみると、

原莊為寺領經年^⑪舒之由、雖令帖送給、彼莊非寺家御領者、誰人歟可申哉、但御寺御領と乍申、四至千百可有限云々、（中略）、院使相語、偽構給事也、被互神裁之日、□^⑫莊^{（件カ）}古老人等、自檀坂東寺領也、^ハ止有難申乎、又無国宣府宜、猥加制止之由、（下略）

とあり、寺領のは非と四至（北限、南限、西限、東限）について莊内の「古老人等」のかかわりが窺える。そして、この請文では莊（原莊）の「古老人等」と明示されているが「古老」の範疇の人たちとして「古老人等」という用語表現が使われていたと考えられる。

この請文の時期から一〇年ほど下った永治元（一一四〇）年十月二十九日付の「東大寺牒案」にも、寺領と四至内の他領存否かわつた古老の存在がみられる。すなわち、同牒案をみると、

欲被且任官符宣旨、如旧返入、且為仏法興隆、依恩免除、為院領字内牧莊所被割取寺領字西部莊四至勝示内治田并敷地合拾貳町五段状、

（中略）

莊園公領下の村落における古老の存在形態をめぐって

牒・件・莊・者・是・桓・武　天皇勅旨田、(中略)、彼此兩莊界畔各別之上、当・莊・元・是・一・円・之・地、寧・四・至・之・内、相・交・他・領・哉、而・古・老・住・人・申・云、未代之比、当莊有国郡煩之時、件在家人等為募權威、所号宮御領作人由也云々、(下略)
 ⑩とあり、寺領の莊園四至内での他領の存否の問題があることと、この他領存否の要因ともいえる莊内の在家人の宮御領作人と号したことを古老住人が申し告げていたことなどを明示している。また、古老は在家人が權威の傘下で院領作人と称したことも申し述べていたのであり、「古老住人」に聞いたのだしたものか、否かは明らかではないが、莊領の現況(院領に寺領の治田を割取られる)を良く知っていたのが、「古老」住人であったといえるであろう。

この牒案と関連する史料である永治二(一一四一)年十月　日付の「美濃国茜部莊住人申文案」には、古老住人の申し述べた内容が詳細に及んでいたのである。すなわち、「東大寺御領茜部御莊住人等解　申進　申文事」には、「請被任御験并度々官符宣旨、如旧紕定往古四至榜示内治田數等、旁被押取田地在家、次第減少相折御年貢八丈綿等、^(綱カ)既及闕怠子細愁状」という情況が記述され、⑪三ヶ条に亘って記載されている二ヶ条に「古老住人」が申し述べた箇所がある。その箇所を次に抽出することしよう。

茜部莊住人元八十余家也。今纔及二三家云々。古老住人申云、如此国郡牢籠之比、以処々陸地畠被立一品宮御領之日、(中略)、件陸地御莊隨一也、而茜部御莊本在家・件村二相向也、隨便宣依出作彼地、為募御勢、号宮御領作人也、以之為由緒、所被分取居之当御莊敷也云々、凡出作他領、雖諸国普通事、無被取居住敷地之例、(中略)「※「東堺友河勝示内、在家敷地旧治田等、為市橋御莊内牧村被^(ツ)耗取事」の条文」

右、古老住人申云、小厚見小路者、自戌亥亥角朴垣辻、(中略)東西行小途也、凡件小路者、自平田莊通皮手村也云々、(中略)、為平田莊加納、所被押取也、古老住人申云、字厚見王大夫政則者、厚見郡司茜郡・平田兩莊下司也、舍弟僧定増ハ茜部莊別当也、(中略)、停止政則・定増等之時、政則依為郡司并平田莊司、(中略)、称公田入平田莊加納也、(下略)「※「北堺朴垣并小厚見小路勝示内治田荒地等、為平田莊加納被押取事」の条

文」

少し長文に亘ったが、荘園内住人である古老が申し述べた内容であり、そこにはすでに触れたように院領（宮領）の作人と号したことの詳細が述べられている。院の權威を募って作人と称した在家人は出作人であり、これを楯に（出作人の）居住敷地Ⅱ荘域内敷地が分取されたことを明示している。

併せて、小見小路は平田荘から皮手村に通じる小路であることを古老が申し述べるとともに、厚見王大夫の政則という人物が厚見郡司である反面、茜部荘と平田荘の下司身分であり、公田を平田荘加納田に編入したことが古老の話によって明らかとなった。そして、政則の舍弟である僧定増が茜部荘別当身分であったことも、古老の申し述べた話によって窺える。

このようにこの住人申文案に現われた「古老住人（住人の古老）」の述べた内容から、単に荘園（村落？）内部における「住人」という立場でないことは確かである。

また、同様な事象を挙げると、久安三（一一四七）年五月二十八日付の「紀伊国神野莊住人解」にみる「神野内猿河村者、当御莊勝示之刻、依公驗理、依在庁申状、依前司詞、依古老議、沙汰切畢」という記載内容であり、神野莊の「住人」がかかわる沙汰に「古老」の「古老議（古老による合議を示すものか）」も役割を果たしていたといえよう。そこには、茜部莊住人の申文（案文）と同様に荘園内部の「住人」とは違った「古老」の立場があったといえる。

このような「古老」の立場あるいは役割は、荘園内の「住人」との差異と捉えることができる文言、すなわちさきの永延元（九八七）年の「筑前国宮崎宮塔院牒」にみえる「国使・検田使・郡司・古老等相共相糺之間」という表現²²によって窺える。つまり、荘園内の公田の存否を確認すべき処置に国衙の官人とともに古老が役割を果たしていた事象は、九八〇年代以来受け継がれていたことになろう。

そして、一〇世紀後半から一二世紀中頃にかけてみられる「古老」「在地古老」「古老在地」「古老人」「古老住人」などの用語で表現されてきた「古老」は、荘内公田の存否および領有と公役にかかわる争い、荘園間の（荘域）領有および押領に関する問題などに役割を果たしてきたといえる。

したがって、現段階では、一〇世紀後半に「古老」の用語が出現して、一二世紀中頃に至るまで「古老」という用語に「在地」「住人」の用語が付加されてきたといえる。そして、その過程で、公領（国衙）と荘園（荘園領主）、あるいは荘園と荘園との間で引き起った領有と公役にかかわる問題解決に「古老」の存在は一つの役目を果たしてきたと考えられる。

さらに、便宜的に「初期の古老」とでも呼称し得る古老は、荘園公領における村落内の共同体構成員として、用語的にも表現されることがなかったと考えている。むしろ、荘域あるいは公領域での古老として把握されていたとみるべきであろう。この観点は、村落共同体Ⅱ集団の古老を否定するものではなく、村落共同体構成員としての「古老」の意識が史料の記載から読みとれないことを提示したものである。

併せて、さきの久安三（一一四七）年の「紀伊国神野荘住人解」に記載されている「依古老議」⁽²³⁾には、一人の古老の存在を表現しているとは考えられない。むしろ、複数の古老の存在が想定し得る。それは、正治元（一一一九）年銘の史料と承知されている「伊賀黒田荘民陳状案」にみえる

一 唐懸三段近年開発之由事^{三十年前後}

陳申云、件田開発之時代、荘内古老之輩一切不見知之云々、往昔之耕作。之由各所申也、（下略）

というように、⁽²⁴⁾荘内に複数の古老が存在し、彼ら古老によると件の田の開発時を一切見知らずというような内容が明示されている。そして、村落共同体内の複数の古老ではなく、黒田荘内の複数の「古老之輩」であったことを表現している。

では、一二世紀中頃あるいは後半までの古老が、〈在地古老（古老在地）〉から〈古老住人〉へと表現を移行させ、さらにどのような表現に変わりながら、村落内の古老へと展開するものであるのか、否かを次に検討していくことにしよう。併せて、古老が一人で、あるいは複数で荘園内または公領内の係争問題の解決に役割を果し得るものか、否かについても触れていくことにしたい。

第二 係争にみる古老の存在形態

一二世紀中頃から後半に至る時期には、古老は「古老住人」と呼ばれていたが、〈古老と住人〉と解釈するよりも〈古老の住人〉と理解する方が妥当であると考えられる。

「古老住人」の時期以降、諸々の係争下で古老はどのように捉えられて呼称されていたものか、あるいは古老自身はどのように称していたものかを考えていくことにしよう。

まず、建永元（一二〇六）年 月 日付の「慈円起請文」をみると、「大饑法院条々起請事」（一一ヶ条）と「荘園事」（八ヶ条）に大きく分けられている。そして、荘園に関する八ヶ条の一つである「藤嶋荘越前国」にかかわる記載をみると、

先件荘者、為平氏没官地、頼朝卿領知之間、以別願白山平泉寺所令寄進也、其後少僧任天台座主治山之間、尋取当莊文書等、召寄彼寺住僧問子細、招取古老百姓尋由來之處、源將軍寄進之時、全不知所當之多少、平泉寺入己之間、更不存滿作之地利云々、爰小僧久歎佛法衰微、（下略）

とあり、藤嶋荘の所当についてまったく知らなかったことが、平泉寺住僧を招集して問いただし、「古老百姓」を招き尋ねるが明らかにできなかったという。また、この所当の状況いかによって佛法衰微をもたらすことも触れ

られているほど、住僧はもとより藤嶋荘の古老百姓に尋ねたことが窺える。

そして、この起請文に現われる古老は、「古老百姓」と捉えられ、「古老住人」ではなかった。一三世紀初めには、古老の呼称で「住人」から「百姓」に変わっていることが窺えるが、荘園内の村落共同体構成員の「古老百姓」とは断定しがたい。

さらに、延応元（一二三九）年八月十八日付の「関東御教書」をみると、出雲国園山本荘と新荘および成楽寺にかかわる事柄で、とくに「可令早停止出雲国園山本荘并成楽寺濫坊^{（妨カ）}、为新荘内致沙汰海山事」について、

右、如当地頭邦道所進貞応二年御教書案者、出雲国園山新莊地頭之高通申境相論事、本新莊成楽寺三箇所各別也、而為二箇所地頭等致妨云々、早尋明彼此之理非、注絵図、召在庁并古老莊官起請狀、可令言上云々、（中略）、自守護所被尋問之處、云本新莊前地頭、云新莊古老百姓等、本荘内無海山之由、令進上起請文畢、（下略）という状況が記載されている。²⁶

この御教書から、出雲国園山新莊の地頭の濫坊によって、海山の存否が係争の源になっていることと、この係争にともなう、その是非を明確にするために、在庁官人・古老・莊官（古老莊官と考えるべきか）による起請文を召したことが、そして守護所の尋問で本荘・新莊の前地頭および新莊の古老百姓らのいうところによると本荘には海山はないとする起請文を進上させたことなどが明示されている。

また、在庁官人とともに古老・莊官（古老莊官か）が起請文を提示したことは、在庁官人といっしょに古老・莊官（古老莊官か）や古老百姓が署名していたことを想定させる。訴訟にかかわる古老の連署とは異なるが、一三世紀前半にも古老らによる連署があったことになるかもしれない。

訴訟ではないが、起請文と同様に文書の紛失の証人的立場で古老が連署押捺していることを、延応元（一二三九）年十月日付の「某紛失状」によつて窺える。すなわち、

処盜犯、仍一家輩并在地者、同所加判行之状如件、

(中略)

〔紛失依頭然、在地老等(古脱カ)与判

下野真光 (略押)

紀 為元 (略押)

藤井末国 (略押)

藤井末包 (略押)

播磨国包 (略押)

とあり、五名の在地の(古)老が署名している。

さらに、この御教書の記載をみるかぎり、古老(百姓も含めて)が新莊の莊域にある村落共同体構成員であるという記載は、同御教書の文言から窺えなかった。むしろ、「新莊古老百姓等」という文言のまま理解するならば、園山新莊の領域に居る「古老百姓」が存在していたことになる。

このように大半の古老は莊園の莊域に莫然と存在していたと捉えることができる反面、現時点では固有の村落内に居るという表現の記載はみられない。

仁治二(一二四一)年銘と考えられている「金剛峯寺衆徒陣状土代」には、「金剛峯寺与粉河寺莊堺相論」に古老がかかわっているが、莊園の固有の村落に居る古老とは把握しがたい記載がみられる。すなわち、

一 於椎尾山者、水無河以西之事明白也、往昔以来、名手莊無交之、(中略)、以知、於椎尾者名手莊内、香御

園是也、又地主琳宗加制止、取鍼之事、相尋古老之处、以外僻事(由脱カ
之中之)虚誕也、(下略)

莊園公領下の村落における古老の存在形態をめぐって

とあり、金剛峯寺と粉河寺の莊園の堺（境界）⁽²⁸⁾に關する相論での対象地域について古老に尋ねているが、村落内の古老であるという明示はない。ただ、百姓は丹生屋という村落の者であるような表現がある（「於丹生屋村之上」⁽²⁹⁾「一丹生屋百姓解云」⁽³⁰⁾という文言がそれである）。だが、明確に村落内百姓と記載しているわけではない。

このことはともかく、この陳状土代にみえる古老がかかわって尋問を受ける内容は、莊園間の莊域の境界での係争（境界相論）であり、すでに触れたような莊内公田の存否にかかわる公領（国衙）と莊園（莊園領主）との係争とは異なる。

しかし、一三世紀中頃以降になると、いわゆる所務にかかわる相論で古老は尋問を受けることになる。すなわち、文永三（一二六六）年四月七日付の「關東下知状」の「小早河竹王丸^(定平)与同美作前司茂平^(小早川)法師^(法名)本仏代左兵衛尉重兼相論条々」において、

一 検断事

右、如竹王丸申者、季平・国平二代之間、於新莊者、致沙汰之处、（中略）、本仏押領之条無謂、且子細申公文段畢、検断事、為同篇歟云々、（中略）、就中、去建保之比、新莊住人等致海賊、令取御物之間、依被下御教書、本仏致沙汰畢、（中略）、加之、平左衛門入道盛阿巡檢之時、当莊犯科事触申之处、出返状畢云々、（中略）、次御教書等事、依便宜、可尋明之由、被仰下歟、所詮、以起請文、可被尋問、信平并新莊、古老人等也云々、重兼申云、新莊、古老人者、竹玉、地頭之間、争可申、実正哉、可有御尋者、可被尋問、本莊住人等也、（下略）⁽³¹⁾

という記載があり、新莊住人らが海賊になつて物を盗つた罪科について、新莊の古老人らが尋問されるべきことが明示されている。つまり、罪犯科の行為に對する検断に沼田新莊の古老人を召し出し、起請文をもつて、尋問されたのである。

一三世紀中頃の段階では、すでに触れた莊園内公田の存否や莊園間の莊域境界で古老が一つの役割を果した段階

とは異なり、所務の一つである検断権行使に対する一助を担う〈古老（古老人）〉の存在があったといえよう。

また、地頭職および下地に関する相論で古老が証人として召し尋ねられていることが、建治三（一二七七）年九月十一日付の「関東下知状案」から窺える。すなわち、「筑前国朝町村地頭佐々目藏人清光代教円与宗像大宮司長氏代僧隆惠相論当村田畠下地事」について、

右、対決之处、如教円申者、当村地頭職者、清光外祖父上野介資信嘉禎二年宛給之以来、令進止下地畢、（中略）、而仰大友出羽前司頼泰、被尋問之处、（中略）、当村古老沙汰人百姓等七人事、就任国地頭代信阿注文、執進起請散状处、沙汰人百姓等者地頭同心之間、不足証人、以社家古老人、可被尋問云々、（下略）

とあり、村地頭側と宗像大社宮司側とで村内の田畠下地の進止に関して対決した状況を記述している文中に朝町村の古老・沙汰人・百姓ら七名では証人不足であるため、社家の古老人にも尋問すべきことが明示されている（ここでは、古老と沙汰人と百姓としたが、古老の沙汰人と百姓とも読みとれる）。

この下知状案の相論の事由についての検討はともかくとして、〈古老〉は筑前国宗像郡内の朝町村に在村していた村落内部の構成員であることがわかる。

また、〈古老〉に加えて〈百姓〉らも七名の証人の中に含まれていたことが窺えるとともに、朝町村に存在していた〈百姓〉らであることも理解し得る。いわゆる村人あるいは村民であったといえる。

そして、一三世紀中頃以後、係争の事由が変わって古老を召し尋ねる事柄もそれに追隨した形態をとり、それとともに召し尋ねる対象呼称も住人ではなく百姓に変化していることが窺え、〈古老・百姓〉あるいは〈古老百姓〉の用語および呼称が顕著になってきているといえよう。

この下知状案と同様な事象を示す史料として、弘安元（一二七八）年五月 日付の「若狭太良荘百姓藤井氏宗陳状案」をもう一つ掲げると、副進の二案文の一つに、

古老百姓真利真安弁申状案就重真訴申被尋下之時、西念母御公事仕候シヲハ、見及候キ、勸心ニ何ト約束シテカ渡候ツラン、不及知候云ミ、母領掌条分明也

とあり、真利と真安の二名の古老百姓の名前が記載されている。

そして、この記載に続き、

件名主職、祖母并西念等、可相伝領掌之条顯然也、相論法、訴訟習、以証文為為詮。而備証文等之上者、(中略)、不足言次第也、所詮、究比段、併仰高察者也、(中略)、宗氏弁申云、自勸心至重真等、不帶一紙証文、而宗氏ハ云僧都御房御宛文、云古老百姓等申状、証文等顯然之上者、何可殘御不審乎、(中略)、古老百姓等申状ハ重真訴訟之時、被尋下状也、(下略)

という記載がみられる。⁽³³⁾

この陳状案では、「古老百姓等申状」を証文と明言していることがわかる。また、この申状とは、真利と真安の二名の古老百姓が弁ずる申状であつたといえる(若狭国太良荘の勸心名および名主職の係争は長く引き継がれている。この陳状案もその一つである)。

「古老百姓」の呼称は、一三世紀中頃から使用され、一四世紀に至るまで用いられることが、次の二史料からも窺える。

その一つは、徳治三(一二三〇)年五月二十四日付の「頼尊奉書土代」にみる、

条々有可被尋沙汰事等、来月二十日以前悉帶地下之文書可令參洛之由、可令下知公文給、且、古老百姓両三人、同可令上洛之

由、被下知候也、可令存知之旨、御沙汰候也、(下略)

という記載がそれで、⁽³⁴⁾古老百姓三人を上洛させるべきという下知の旨が明示されている。

その二つは、元享四(一二三四)年三月 日付と考えられている「伊予弓削島莊百姓申詞」の「寺領伊予国弓削

嶋百姓等就訴訟遂問答条々事」において

訴人 百姓等則古、老、百、姓、進士入道 宗太郎 平三

論人 預所

とあり、弓削島莊百姓らの訴訟にかかわる問答の前文に、訴人と論人が記載されている。そして、訴人の名前が挙げられていて、その中に「古老百姓」と明示されている。

古老百姓に関する史料を二例掲げたが、相論和与に関する史料を併せて次に挙げることにしよう。

それは、文保元（一二三）年五月二十六日付の「山内通資・慈観通忠和与状案」にみえる六ヶ条の内の一ヶ条に「一 弥真名内平五郎入道之上畠・同行安名内平内入道」云々という文言に続き、

次於自余所々之堺者、両方相互可致沙汰、敢不可違乱者也、但就堺之事、於莊家相互有異論、堺等事、相貽不審者、召出古老之百姓、以起請之詞、尋究之、可落居也、（下略）

とあり、⁽³⁶⁾ 各名田畠などの所有地の基礎となる堺（境界）にかかわる係争で、「古老之百姓」を召し出して究明した上で決解させるべきことが記載されている。

この和与状案に現われた古老百姓も、さきに掲げた古老に関する史料と同様に、村落共同体構成員としての「古老」の明示はない。ただ、すでに挙げた建治三（一二七）年九月の「関東下知状案」に記載されている「当村古老沙汰人百姓等」のみが、⁽³⁷⁾ 固有の村落内古老の存在を示す一例になる。この「当村古老」を除くと、大半の古老は莊園内の存在を示す。

このように古老に関する史料をみるかぎり、村落内「古老」の一事例を除くと、莊園内「古老」と表現される事由がなければならぬと考えられる。

言い換えると、何故に村落内の「古老」ではなくて、莊園内の「古老」でなければならないのか、と考える

わけにはいかない。

しかし、この疑問を解決に導いてくれる古老にかかわる史料は抽出し得ない。ただ、村落内古老らに限定することなく、荘園内古老らに召し尋ねる係争―単純な荘内公田の有無から荘々の境界論争、荘民らの罪犯検断などにかわりなく―には、肩寄りのない公平な判断材料を必要としたのではないかと想定し得るが、現段階ではその証となる史料を見出すことはできない。

ところで、一三世紀前半頃から「古老住人」ではなく、「古老百姓」という文言に変わってくることは、すでに掲げた一群の史料から理解し得るが、近江国伊香立荘にかかわる史料には、「古老住人」の用語が用いられている。すなわち、文保元（一三二七）年七月十三日付の「大式法印房書状」にみえる「伊香立荘民人乱入狼藉事、先代未聞之珍事、言語道断候敷」という事態に、「帶次第文書、古老住人□召具、可令出洛」というように古老住人らを召し具えたことが窺える。

また、翌文保二（一三二八）年三月十二日付の「近江伊香立葛川相論事書」にも、

一 此沙汰之間、令列参、重々申入了、所詮、両方ヲ相宥、可知談之由、申入之處、伊香立葛川ニ可相談^云、古老住人等、可登山事、

とあり、伊香立荘と葛川との間で引き起った相論に「古老住人等」の解決への関与が窺える。この伊香立荘にかかわる係争解決には、「古老住人等」の記載がみられるが、この事例は例外的なものとも解釈できる。しかし、例外的事例と断言し得るものかは判断しかねる。むしろ、例外的事例と認識するよりも、一四世紀前半に大半「古老百姓等」の用語が用いられる情況下で、なぜ伊香立荘関連のみに「古老住人等」が用いられる必然性があつたのかと考える方が妥当な理解かもしれない。

なぜなら、弘安十（一二八七）年二月 日付の「近江葛河行者等解」には、

右、伊香立莊沙汰人百姓等、先年此於葛河領内、或致鱷流、或構炭竈之間、(中略)、近年彼莊^(住民)恣致殺生、

(中略)、沙汰人返答伝、炭竈口古^マ老^マ百姓并故実沙汰人雖加制禁、(中略)、更不令絛用、今仰尤驚存者也、早以

此等之次第、相触土民、具^(マ)忝可申左右云々(下略)

とあり、伊香立莊沙汰人百姓らによる狼藉にかかわる「古老百姓」らの様子が窺えるとともに、一二八〇年代の伊香立莊に関する「古老百姓」は、一三二〇年代には「古老住人」へと変わったことになるが、この用語の変化にどのような要因が内在しているのかは明らかではない。ただ、一方の「古老百姓」の用語は葛川での一二八〇年代の文書であり、他方の「古老住人」の用語は伊香立莊での一三二〇年代の文書であるという違いは指摘し得る。

莊園内の古老あるいは村落内の古老は、莊地または村落在地と直接関係する階層であるが、神社や寺院における古老の存在がみられる。すなわち、建治元(一二七五)年九月日付の「佐渡長安寺置文」には、「底弱寺僧等、為若院主、若古⁽⁴⁾老宿徳」という文言があり、弘安二(一二七九)年三月 日付の「大中臣忠光申状」には、「神主古老之神主者、傾冠而令恐歎畢」という記載がある⁽⁴⁾。

寺院の古老僧侶および神社の古老神主とかかわる事態は、いずれも係争と関連するものである(「早可經上訴」[同置文]、「度々雖及訴陳」[同申文])。

このように何らかの係争・相論にともなつて「古老」にも解決の糸口をつかもうとする情況が窺える。

したがつて、莊園、村落、社寺にかかわらず「古老」の役割は、係争・相論での是非を決めるために申し述べることであり、解決に導くべき手助けであつたといえよう。

それゆえ、「古老」の存在は、かならずしも村落内の集团的形態を呈していたと考えがたい。むしろ、さきにも触れたが、莊園内あるいは村落内の係争・相論にかかわらず、召し尋ねられた「古老」に求められたのは、公平・公正な申上であつたと考えられなくはない。さらに、莊園内あるいは村落内での集团的存在形態と限定して理解し

得るものかは、あらためて検討すべきかもしれない。

では、莊園内または村落内にかかわらず、耕筥、莊官職、そして祭祀における「古老」の存在形態とは、どのようなものであるのかを次に検討していくことにしたい。

第三章 地域共同体における古老の存在形態

古老は個々の村落共同体成員として、莊園と公領、または莊園と莊園の間で引き起こる堺（境界）論争や罪科人の検断などにかかわる存在ではなく、莊園公領域内の「古老」という立場で役割——起請文およびそれにとりまう尋問での申上など——を果たす存在であることはさきに論及してきた。

この視点の例証となる史料として、弘長二（一二六二）年三月一日付の「関東下知状」の越中国石黒莊雜掌幸貞と地頭と考えられる定朝らの相論二六ヶ条の内、「山手河手事」をみると、

近隣住人等者、争可知及承久以前事哉云々者、御使入部之次、以起請文、被尋問承久以前例近隣古老住人等、可有左右焉、

とあり（傍点―奥野、以下同様にて略す）、かならずしも村落内の古老を明示するものではなく、「近隣古老住人等」（「近隣住人等」と記載するものと同じではないと考えている）と明記している。そこには、一つの村落内の「古老」を限定したものではなく、近隣の村落を含めた広範囲に居住する「古老」の存在が示唆されていると理解し得るであろう。

この下知状の翌年銘の史料に「近江大嶋社神事日記案」があり、この日記案の文末をみると、弘長三年五月八日 大嶋両莊ムラ人等

津田ムラ人 助高判在

宗利判在

嶋ムラ人 サカノウヘノヤス友判在

同ムネヤス判在

という記載があり、すでに一二六〇年代には「ムラ」意識が荘園村落内にあったことを示してくれる。

このことによつて、さきの下知状に示された近隣の「古老」は、一つのムラの「古老」を表現するものではないと理解すべきであろう。

では、一村単位ではなく、荘・公領域での古老の役割と存在形態はどこまでの範囲であろうか。このことについて、次に若干検討することにしよう。

まず、耕営にともなう根本的な灌漑用水にかかわる古老の存在を、徳治三（一二三〇八）年七月二十六日付の「東寺雑掌頼尊書状案」から窺うことにする。「大山荘井料田事」云々からはじまつて、用水について展開していくが、この用水に古老がかかわつて、

一 用水事、当時宮田方如被申候者、みつひをかけて、可耕作云々、就其、古老の物共ニ尋申候へハ、任先例、別の井をたてよこほりをうめすは、十日ともひ（日）のてり候はん時は、大。荘へ水□きつき候事、ゆめく

候ましきよし申候事、（下略）

と申し述べていることがわかる。⁽⁴⁵⁾

宮田荘と大山荘の井料田とともに、用水についての沙汰にともなつて、宮田荘あるいは大山荘の古老らか、宮田・大山両荘の古老らかは明確ではないが（記載内容から宮田荘内の「古老の物共」と想定し得る）、灌漑用水の流水状況について「古老」らが申し述べていることが窺える。

古老らに尋ねて申し述べたことは、先例に任せて、別の井（井堤か）の縦横の堀を埋めなければ、十日間ほど日照がないときには、大山荘へ河川の水は流れ続いて来るということであつた（井堤をあげれば、余流が大山荘へ流れ続いていくという意図を示しているのであろう）。

このような古老らの申上とは別に、同年銘のものと考えられている「東寺雑掌頼尊書状案」には、

此条用水之習、水のとほしき時こそ、相互ニ大切の事にて候時に、水口を一丁五段やしなひ候て後、其余流の候・ハ・ん・時、当・荘・分・の・田・を・やし・な・ひ・候・事、大・ニ・可・為・不・定・候・歟、如何、

と、河川の水の余流について問い返している。古老らによる前例の申し上げによって、大山荘と宮田荘の河川の灌漑用水の係争は決着はつかず、徳治三年以後も継承されていく。

このような事象は、大山・宮田両荘の「古老之物共」でなかつたことによつて、古老らの申し述べた事柄が受け容れられなかつたことを示すとともに、荘園内の一村の古老に限定されることなく、荘内の複数の村落に居住していた古老たちの存在が充分に考えられるといえよう。

そして、このような事象は、荘園内を流れる河川にある各村落共同体の利害によつて、古老らが担ぎ出されたとは考えがたい。むしろ河川の流水にかかわる「先例」を承知していたのが「古老」らであつたと考えるべきであろう。

また、大山荘の用水・灌漑問題は勸農とも関連していたことは、徳治三（一三〇八）年六月五日付の「丹波国大山荘預所下知状案」の「大山荘用水事、去三日治定候了、（中略）、忝被差使者、且切遣井料田一町五段、且可被致勸農之沙汰候」という文言から窺える。

ただ、直接的に勸農に古老らがかかわっていたとはいいがたいが、間接的には用水関連で古老らはかかわっていたことになろう。

このように荘園内の「古老」らは、個々の村落共同体成員としてではなく、荘園における耕営、とりわけ用水・灌漑での古習慣例の有識者・経験者であったがゆえに、係争時に尋ね召された存在であったと考えている。

では、古老らは荘園内の神社祭祀に関係する存在であったのであろうか。

古老らが神社祭祀にかかわる指摘は、すでに義江彰夫氏らによっておこなわれている。⁽⁴⁸⁾ とりわけ、義江氏が論証史料として掲げられた「春時祭田之日」云々とはじまる記載には、確かに「集郷之老」と明示されているが、もう少し詳細な記述を窺ってみると、「凡春時祭田之日。集郷之老者。一行郷飲酒礼」とみえ、⁽⁴⁹⁾ さらに春季祭礼の様子について、次のように詳述している。すなわち、

謂。郷飲酒之礼。六十者坐。五十者立待。所_レ以明尊長也。(中略)。所_レ以明養老。即令郷党之人親・執礼。

(中略)。唐会云。縣耆祭月集・之老者。一行郷飲酒礼。六十以上坐堂。五十以上立待堂下。(中略)。古記云。

春時祭田之日。謂国郡郷里每村在社神。人夫集聚祭。若放祈年祭歟也。(中略)。今五十以上人。尊六十以上之

道耳。跡云。祭田。謂每郷村立社。人々聚集祭。(下略)

とあり、⁽⁵⁰⁾ 春季の祭礼の情況が窺えるとともに、高齢者を尊敬することが「六十以上坐堂」「尊六十以上人」という文言からわかる。そして、この「春時祭田」の記載に「唐以六十為老。於此令以六十一為老耳」という文言があり、唐代でも六〇才以上を高齢者と認識していることが理解し得る。

これらの記載によって、諸国郡郷里の村落ごとに神社が祀られ、郷の高齢者つまり「郷之老者」⁽⁵¹⁾ 古老人が中心に、その子弟らとともに村社の神社祭祀を春秋二季に執りおこなっていたことが窺える。そして、九世紀半頃には、すでに村落内で神社祭祀が古老人を中心に営まれていたと考えられる。

村落内の神社にかかわる古老らの様子を示す史料は皆無であるといえよう。ただ、村落内であるのか、否かも、また古老が中心・中核になって営まれるのか、否かも明らかにしたいが、一一世紀前半頃に寄人が中心に神社祭

祀をおこない、その後住人が中心となつて神社祭祀を営む情況を示す延久四（一〇七二）年九月五日付の「太政官牒」（史料Ⅰ）と二三世紀後半に古老が神事を勤仕・奉公する事態をあらわす建治三（一二七七）年銘と考えられている「佐波俊貞申状」（史料Ⅱ）は、古老らの神社祭祀とのかかわりを示唆してくれるであろう。

そこで、二史料の神社祭祀に関する記載を次に窺つてみることにしよう。

史料Ⅰ

検旧記、別宮国家鎮護之砌、奉安置大菩薩御鉢奉修神事、爰旧司寄人他行之後、無相伝莊嚴之人、然間郷中比年旱魃痛患已以無絶、仍住人等祈禱之处、（中略）御託宣云、我是八幡垂跡別宮、而住人不成其勤、因之我所致之禍難也云云、其後住人奉顯御鉢、造立神殿之後、五穀成熟、郷土安穩者、（下略）、

史料Ⅱ

欲且依古老朝夕神事勤仕奉公、且就先知行実、宛給周防本郡書生職事、件所者、先々宿老奉公野之輩今拜領跡也、然者、俊貞而進署一分大小会神事勤仕之条、越于同輩之間、依嚴重之忠、去文永年中補給之、（下略）

史料Ⅰと史料Ⅱには、時期的差異と神社祭祀関係者（住人と古老）の違いがみられる。ただ、二史料とも村落共同体成員の住人あるいは古老であるという明示はないという共通性が窺える。

だが、神社祭祀を営む住人らは、村落を包括した「郷中」の人たちであろうと考えられる。また、神社祭祀の一つである朝夕神事を勤仕・奉公する古老は、郡書生職に補任されたことから複数村落を含む郡中の人であり、特定の村落内の古老ではなかったといえよう。

ゆえに、住人ら（古老を包括した「住人等」であるとも想定し得るが、明確さに欠ける）の神社祭祀であろうと、古老の神社祭祀（朝夕神事）であろうと、いずれも一村落地内成員に限定される人たちではないことが想定し得るであろう。

したがって、神社祭祀においても、古老らは、九世紀以来、一村落の村民としてではなく複数村落の里・郷・郡内での位置で把握される存在形態と考えられるようである。

一方、古老は神社祭祀のみに関係する存在ではなく、寺院ともかわりを持った存在であったことを想定させる史料が一例ある。すなわち、寛治五（一〇九一）年八月十一日付の「肥前国僧円尋解」にみえる

右件地、本自無領主、偏空荒野也、而今切掃^③、擬建立一字草堂、仍申請古老在地并宮衆等与判、為令停止非道之妨、所申請如件、

という記載がそれであり、寺院草堂（別所寺院）建立に関与していた古老在地（在地の古老か）の存在が窺える。だが、寺院に關係する古老が仏教法会に勤仕していたかは明らかではない。ただ、寺院草堂建立にかかわっていた古老は存在していたと考えられるであろう（古老とともに宮衆^④神社關係者も草堂建立にかかわっている）。

このことはともかく、神社祭祀にかかわってきた「古老」は、一村落共同体成員にとどまらず、郷・郡内の広範囲の人たちであったと考えられることから、便宜的に「広域共同体成員の古老」と呼称しておきたい。

この広域共同体成員としての古老は、神社祭祀に限らず、すでに論及してきた種々の係争にもかかわってきたと考えている。

では、広域共同体成員である古老には、宛行われる官職はあったのであろうか。次にこのことを少し垣間みていくことにしよう。

荘園公領における古老の存在は、単一の村落よりも、複数の村落にみられることを検討してきたが、彼ら古老らは官職に補任されるほどの身分であったゆえに、耕営（勸農）や係争などに召し尋ねられ、神社祭祀にもかかわってきたであろうと考えられる。

だが、各村落内の古老たちが補任される官職は、荘園公領にかかわらず、経営・管理の中心的責務を果たす身分

とは考えがたい。このことを示してくれるのが、承久二（一二三二）年六月 日付の「法橋某下文案」である。この下文案をみると、

下 黒田荘 案文

可番頭為下司之進止事

右、当・荘番頭事、古老之百姓中、簡器量、所定彼職也、而近來者番頭非器量之者、於自今以後、早為下司之沙汰、計其器量、可補之、一向可下司之進止也、（下略）

とあり、黒田荘の番頭は古老の百姓中から「器量」の者を番頭職に補任することが明示されている。併せて、近來の番頭は器量の者ではないが、これから以後は古老らの器量を計ってから下司の沙汰で補任すべきことが示されている。

この番頭職付帯者は黒田荘内の古老百姓の中からの器量の者であり、一村落内の古老百姓中の器量の古老ではなかったことが明示されている。

このことを提示してくれる史料は、すでに掲げた正治元（一一九九）年銘と考えられている「伊賀黒田莊民陳狀案」にみえる「莊内古老之輩」という文言であり、黒田荘に限ると莊園村落に視点を当てた「古老」らではなく、各村落を超えた莊園に視点を当てた「古老」らであったことが理解し得る。

このことはともかく、黒田荘内の古老（百姓）には、莊官職に補任される機会があつたといえよう。番頭（職付帯者）という下級莊官ではあるが、器量ある古老は莊園経営・管理の末端機構に存在していたことになるろう。

ただ、黒田荘の古老番頭職付帯によって、番頭制莊園と称される莊園内に古老番頭が存在するという一般論へ導くことは、現段階ではできないと考えているが、少なからず古老の番頭職付帯者は存在していたであろうという想定は不可能ではないであろう。

したがって、荘園公領にかかわらず、古老は居住地（荘域または公域）での出来事を処理すべき立場での申述者および解決協業者という存在形態であつたといえよう。それゆえに古老はその中から下級官職者として補任される存在形態であつたと考えられる。

結びにかえて

古老の究明では、先学諸氏によつて村落成立・形成にともなう初期段階に現われる存在として把握され、古代の村落から中世の村落へ展開していく過程での存在であるとする論究⁵⁶、中世前期での村落身分である住民とともに把握され、「住人等」と統括的形態で集団的呼称と解釈された論稿⁵⁷などが提示されてきたといえる。

一方、「住人等解」段階から「百姓等申状」段階へと展開することを軸に中世村落の共同体についての論究には、〈古老〉の村落内での存在への明示がない論稿と⁵⁸、中世初期の村落の展開の中で根本住人型村落と領主型村落の存在を提示し、初期村落（共同体）構成員としての呼称を「住人」と捉える一方で、村落代表者の存在を住人と対置させた論稿⁵⁹には、村落（共同体）構成員と考えられる〈古老〉の存在は提示されていない。

このように中世の初期、前期、そして後期にかかわりなく、中世村落（共同体）成員は「住人等」であり、「百姓等」であると明示する論究が主である。そして、この論究には、〈古老〉の存在形態については視点外であつたようにみえる。

しかし、古代末期以後、中世後半に至る間に古老は、荘園公領に存在し続けるのみでなく、荘域内公田の有無、荘園間の境界係争、荘園間の用水（灌漑）相論、村落内神社祭祀、そして官職への補任という多方面での役割がみられるが、単に特定の村落内での責務を果たすのではなく——村落共同体構成員の住人あるいは百姓とともに「古

老・住人等」「古老・百姓等」と一括されて言及されていることと反対に——、各村落を統括する莊園（広域共同体）の構成員として召し尋ねられて、申し述べる存在形態であると考えられる。

なぜなら、古老にかかわる大半の史料には、固有村落の〈古老〉の明示はみられず、むしろ、莊園公領下の〈古老〉としての存在形態を示している事態から、莊園公領つまり広域の地域共同体成員と捉えられている〈古老〉と考えるべきであろう。

それゆえに、莊域内公田有無問題をはじめ、多様な係争・相論の解決の材料に、〈古老〉を召し尋ねて申し述べさせて裁決の判断に組み入れる事象は、特定の村落への配慮を否定するために莊域あるいは公領域の〈古老〉の存在が必須であったと考えている。また、特定の莊園間の係争で両莊の古老が召し尋ねられる情況はみられるが、両莊域の古老を対象にしているもので、決して特定（固有）の村落の古老を対象にしていなかったといえる。ただ、一史料にのみ「当村古老沙汰人百姓等七人事」とあり、「当村田畠下地」にかかわる相論ゆえに、特定（固有）の村落内の〈古老〉らの申し立てを必要としたと考えられる。

ところで、古老について検討してきたが、「古老・住人等」「古老・百姓」という呼称に視点が当てられているが、「旧老田堵」「古老沙汰人」と「古老住人」「古老百姓」との関連（出現時期や消滅時期なども含めて）についての究明は、より一層〈古老〉の存在形態を明確にすると考えるが、ここでは検討し得なかった。今後の古老に関する課題として提示して結びにかえたい。

註

（一） 中世村落内の構成員について論及した論稿は数多くあり、五つほどの論稿を掲げるとどめたい。

黒田俊雄「中世の村落と座——村落共同体についての試論——」（『日本中世封建制論』所収）。

戸田芳実「領主的土地所有の先駆形態」および「山野

の貴族的領有と中世初期の村落」(『日本領主制成立史の研究』所収)。

河音能平「中世社会の成立期の農民問題」(『中世封建制成立史論』所収)。

島田次郎「日本中世共同体試論」(『日本中世の領主制と村落』下巻所収)。

鈴木國弘「新領主制論」(『在地領主制』へ中世史選書2)所収。同論稿で、本源的共同体の統率者として、「邑老」「古老」を捉えている。

(2) 清水三男「中世村落生活」(『日本中世の村落』所収、後に『清水三男著作集』第二巻再録)

(3) 戸田、前掲書

河音、前掲書。

(4) 島田、前掲書

入間田宣夫「平安時代の村落と民衆の運動」(『百姓申状と起請文の世界』所収)

(5) 入間田、前掲書

鈴木、前掲書

(6) 蘭部寿樹「中世前期村落における古老・住人身分」(『日本中世村落内身分の研究』所収)

(7) 蘭部、前掲書

(8) 平安貴族の日記をいくつかを繙いてみると、「古老」云々という記載は、『春記』(増補史料大成本、以下同様にて略す)の長曆四(二〇四〇)年八月二十四日の条に、伝申昨日勅命旨日記に作補返奏云、壮年之者猶以愚頑也、今已及老乱、更不可分別、是非愚耄弥其故也、但卿中

有・古・老・者、先以到問、非是問賢人、只為 聞古事云々

という記述があり、公卿中にいた「古老」のことである。そして、「今已老乱、更不可分別、是非愚耄弥其故也」云々という文言によって、老齡化した公卿を「古老」と称したようである。

また、『小右記』の万寿元(二〇二四)年六月二十六日の条の「老人裸衣可無便宜」という文言によるかぎり、「老人」の認識が窺える。

だが、これらの貴族の日記以外には、「古老」「老人」の用語は抽出し得なかった(『中右記』七の長承四(一一三五)年三月二十三日の条には、漢詩に「老人」用語がみえる)。

一方、在京の貴族層が在地状況の把握で、「玉串荘人」(『小右記』一)、「莊民」(『長秋記』二)などがみえる。

(9) 入間田、前掲書

(10) 蘭部、前掲書

(11) 『風土記』(日本古典文学大系所収)

(12) 『平安遣文』第二巻、第三二八号文書(以下同様にて、平安遣文二一三二八というように略す)

(13) 平安遣文三二七三二

(14) 平安遣文三二七五六

この史料にみえる「旧老」の連署について、入間田宣夫氏は「訴訟の文書には一〇名内外から二〇〜三〇名にもおよぶ『田堵』『住人』『百姓』が連署することが通常である。『旧老』『古老』だけの連署あるいは庄官とも

に連署することは比較的初期の例にかぎる」と言及するが、旧老などの連署が存在する要因についての論及はない（入間田、前掲書）。

(15) 平安遺文四―一二六一

(16) 平安遺文三―七三二

(17) 平安遺文五―二一九六

(18) 平安遺文六―二四五二

(19) 平安遺文六―二四六九

(21) 平安遺文六―二六二二

(22) 平安遺文二―三二八

(23) 平安遺文六―二六二二

(24) 『鎌倉遺文』第二巻、第一〇七五号文書（以下同様に、鎌倉遺文二―一〇七五というように略す）

(25) 鎌倉遺文三―一六五九号文書

(26) 鎌倉遺文八―五四六七

同史料にみえる在庁（官人）、古老、荘官らの起請文を召上げるとは、〈古老〉を含めた上級身分層の申し述べた事柄の公平・公正なことで、証言＝証拠をより一層求めたものといえよう。

(27) 鎌倉遺文八―五四九五

(28) 鎌倉遺文八―五九一二

(30) 鎌倉遺文一四―九五二

この史料にみる「古老人」は「古老」と同じ用語例と考えられる。その例証として、文永十一（一二七四）年のものと考えられている「若狭前河荘円栄訴状」に、「被入六波羅殿御使於荘家、召問古老・沙汰人・百姓等」

という記述と、「薬師寺左衛門入道通賢（中略）行念両人、入部荘家、被召出古老人等」という文言によって、古老すなわち古老人であることがわかる（鎌倉遺文一五―一六〇二）。

(31) 鎌倉遺文一七―一二八五四

(32) 鎌倉遺文一七―一三〇六四

若狭国太良荘および藤井宗氏に関連する史料として、同じ弘安元年五月付の「若狭太良荘百姓等申状」（鎌倉遺文一七―一三〇六三）と「小槻重実重申状」（鎌倉遺文一七―一三〇六二）があり、いずれも「観心名（半名）」の領知にかかわる係争を示している。

(34) 鎌倉遺文三〇―一二三二六五

この史料のように「古老百姓両三人」と実数で表現されることはめずらしく、「古老百姓等」という以外に、徳治三（一三〇八）年七月二十六日付の「東寺雑掌頼尊書状案」にみるような「古老の物共ニ尋申候へハ」という表現もある（鎌倉遺文三〇―一二三三二二）。

(35) 鎌倉遺文三七―二八七一一

(36) 鎌倉遺文三四―二六二一五

(37) 鎌倉遺文一七―二八五四

(38) 鎌倉遺文三四―二六二六八

(39) 鎌倉遺文三四―二六五八八

(40) 鎌倉遺文二一―一六二〇二

(41) 鎌倉遺文一六―一二〇二四

この史料以外にも、古老の寺僧の記載にみえる「其間肅寺之古老等」がそれである（鎌倉遺文六―一三九九〇）。

(42) 鎌倉遺文一八一—一三五三〇

(43) 鎌倉遺文一二一八七七五

(44) 鎌倉遺文一二一八九五五

この史料と同年月日付の同文の史料がある（鎌倉遺文一二一八九五五）。

また、文永一一年銘の「近江大嶋社三度神事日記」にも「村人等」（四名連署）とある（鎌倉遺文一五一—一七八五）。

(45) 鎌倉遺文三〇—二三三二一

大山荘と宮田荘に関する用水についての史料は、ほかに六例ほどある（鎌倉遺文三〇—二三二九四、鎌倉遺文三〇—二三二七〇、二三二七一、鎌倉遺文三〇—二三三〇一、鎌倉遺文三〇—二三二八二、鎌倉遺文三〇—二三二八四）。しかし、いずれの史料にも古老が関係した記載はみられない。

(46) 鎌倉遺文三〇—二三三二一

(47) 鎌倉遺文三〇—二三二八三

(48) 義江彰夫「儀制令春時祭田条の一考察」（『古代史論叢』所収）

(49) (50) 「儀制令」（『令集解』第三卷、〈新訂増補国史大系

本〉所収）

この儀制令に記載されている春時祭田には、「国郡郷里毎村在社神」、「毎郷村立社」、そして「集郷之老者」という文言が記載され、宮座の源流を考えさせる好史料となると想定している。すでに村落ごとの神社祭祀を営むべき神社は九世紀半頃に存在していたことが窺える。併せて、古代の宮座を検討する契機となると考えている。

(51) 平安遺文三一〇八三

(52) 鎌倉遺文一七一—一二九一三

(53) 平安遺文四—一二九九

(54) 鎌倉遺文四—二六二〇

(55) 鎌倉遺文二—一〇七五

(56) 人間田、前掲書

(57) 蘭部、前掲書

(58) 島田、前掲書

(59) 小山靖憲「初期中世村落の構造と役割」（『中世村落と

莊園絵図』所収）

(60) 建治三年九月十一日付「関東下知状案」（鎌倉遺文一七一—二八五四）

